

< 資料 >

2020年度教職相談活動報告

片山敬子

はじめに

今年度は、コロナ感染の影響を受け、相談活動を原則リモートで行うこととなった。新しい面接指導のやり方を学ぶ機会にはなかったが、実際に行ってみると、対面で行う場合とは大きく異なり、学生からの声は予想に反して不評が多くを占めた。そして、教員採用試験を受験する学生にとっては、教育実習の時期が変わり、採用試験の日程や内容に変更が生じ、さらには受験地域によって対応がそれぞれ異なるなど、先を見通すことが大変困難な波乱に満ちた幕開けとなった。

1 相談概要

相談内容は、従来どおり教員採用試験への取り組み方や試験内容に関する準備の仕方についての相談がほとんどであったが、今年度はコロナの影響により日程変更、会場変更、内容変更等が発生し、学生はそれらに応じた対策を取ることが求められた。昨年度から昨年実績を踏まえて準備を重ねてきている学生にとっては、小論文がなくなったり、実技試験が少なくなったりということが次々にHPにアップされる中、自分の受験地の採用試験内容を正確に把握するところから今年度の第一歩の取り組みが始まった。また、学生の中には民間企業の採用試験や大学院入試と並行して教員採用試験を受ける複線型の進路を考える学生もあった。今年度は入社試験も院試もリモートで行われるケースがあったものの、教員採用試験の面接や模擬授業等は通常通り対面で行われたので、「対面のよさ」を活かして自分の熱意や意欲を空気感も含めて的確に伝えることができるかが、面接指導においてより重要になったように感じられた。

2 教員採用試験に向けての取り組み

前述のとおり、今年度は昨年度とは異なった条件下での取り組みがスタートした。昨年度までは、教員採用試験受験者を対象として、外部講師を招いて集団での面接指導を行ってきたが、コロナ感染防止に配慮し実施を断念した。また、授業がリモートとなる中、教員採用試験間近の4年生の教育実習が延期となり、3年生に対しての教員採用試験を意識した態勢づくりの指導時期を変更せざるを得なかった。教員採用試験の1次試験は6月下旬から7月にかけて順次行われ、その多くが8月上旬までに結果発表となったが、中には8月の2次試験日程を延長し、1次試験も合わせて1度に試験を行った県もあり、1次と2次の試験内容を長期にわたり準備せざるを得ない状況に焦点が絞切れず、困惑する学生の姿もあった。様々な変化に、どのように柔軟に立ち向かうべきか、教員採用試験に挑戦する過程でも学んでほしい。

3 「学び・遊び・つなぐ」プロジェクトのコーディネート

今年度は、「学びの教室」5コマ、「学びの座談会」1コマ、「遊びの教室」2コマ、「つなぐ教室」4コマ、「つなぐ座談会」1コマ、「つなぐパネル」2コマを行った。計15コマの参加

人数の総数は584名であった。このプロジェクトも、コロナ禍で参加人数、会場、オンラインでの参加等配慮や工夫を行ったものの、実際には昨年度より参加人数が約300人減少することとなった。「学びの教室」では、幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校から先生をお招きして今までの教員生活を振り返っていただきながら、初心から今日までの歩みや大切にされている信条などをお聞きし、教員としての熱意溢れる生き生きとした姿を学ばせていただいた。「つなぐ教室」では、シンガポールとバンコクの日本人学校から帰国された先生方から、日本人学校の果たすべき役割、異国での生活で学ばれたこと、貴重な経験を通して実感された人とのつながりや仲間との出会いを、リアルな体験談とともに語っていただいた。「つなぐパネル」では、「高等学校における生徒支援」と題して、県立湖陵高校と私立中高一貫校の青翔開智高校の先生に具体的な支援の実情をお話いただいた。学生は専門高校の実態や個性的な中高一貫校での取り組み等に触れ、新鮮な驚きとともに自分の出身校との違いに目を見張り、先生方が心を砕きながら生徒と一緒に夢を持って前向きに取り組まれている姿に深い感銘を抱いたようであった。

4 成果と課題

教職相談は、原則リモート対応で行っていたが、学生から対面で相談をとの要望が相次いだ。リモート対応では時間管理はきちり行えるものの、機器に不具合が生じるといたずらに時間を消耗し、指導が十分行えなくなる危険性がある。さらに学生の方からは、環境の確保が難しいとの悩みも聞かれた。

そんな中での相談活動では、コロナ禍の中にあっても、学校現場で子ども達や先生方と直接実際に関ってみたい、その経験で接し方や指導方法などを具体的に学びたいという要望が聞かれた。すでにボランティアや非常勤職員として、部活動の補助や教員業務の補助を通して児童生徒の実態や教員との連携の在り方等を学んでいる学生もあり、4年生の中には非常勤講師として勤務することで、来年度に向けた足がかりを着実に育てている学生もあった。

そこで、学生のニーズに合致する学校とのマッチングを行うことで、希望する学生が自分の適性を見極め、教員としての資質・能力を掘り起こす機会として活用できるのではないかと考えた。この状況下では、制限されることも、配慮を要することもあるけれど、だからと言ってチャンスを求めないのではなく、挑戦していくことを通して自分自身と向き合い、どんな力を磨いていく必要があるのか、将来に向けた自らの方向性を自分の力で見定めてほしい。また、学生である彼らにはまだはっきりと捉えられていない想定される課題への立ち向かい方など、実際の事例への対処方法を具体的に考えていきながら、実践への意欲を高めていきたい。

相談対応は、基本的に対個人で行ってきているが、対複数人で行うことも考えている。特に来室する学生が地域学部・工学部・農学部にわたり、学部内でのつながりが、ましてや他学部とのつながりがいささか希薄であり、教職を共に見据えていく中で、つながることで得られること、生まれることが必ずあるからである。また、同じ目標に向かって切磋琢磨する仲間意識を持つことで、自分の殻を破り一歩前に出る勇気や自信につなげてほしい。

片山敬子（鳥取大学教員養成センター）